

次世代育成支援東京都行動計画(後期)の評価に係る調査報告(概要)

調査の概要

【目的】

「後期行動計画」を評価するために、子供自身など支援の当事者の声を反映できるような客観的な評価基準を作成することを目指す。
子供及び乳幼児を持つ保護者への調査を実施し、子供自身の声を施策に生かすことの意義について検証し、その結果を後期行動計画の進行管理に活用する。

【実施主体】

TOKYO PLAY (2010年設立)
「すべての子どもが豊かに遊べる東京を」というミッションを掲げ、子供の成長と福祉の基礎である「遊ぶことの大切さ」を行政・実践者・研究者・企業・一般市民に広げる活動をするために設立
<前身> 「子どもの遊びと大人の役割研究会」
児童館・冒険遊び場・学童保育等の職員や保育・建築などの研究者などを中心に2007年に設立

【専門委員会による検討】

社会福祉、児童福祉、保育など幅広い分野の有識者(6名)による専門委員会を設置し、指標やヒアリングなどの方法論などについて検討。

<検討経過>

- ・ 第1回 調査の全体構成、ヒアリングの方法論、項目などの検討
- ・ 第2回 ヒアリング方法について検討・決定、ヒアリング対象団体などの検討
- ・ 第3回 調査一部結果についての報告、報告書の構成などについての指針を決定
- ・ 第4回 結果分析の再検討、調査全体の考察の検討
- ・ 第5回 調査報告書の最終検討

【グループヒアリングのファシリテーター】

プレーパークや児童館、子育てひろばなどでの現場経験がある者が担当。
ヒアリングの環境づくり、ファシリテーターとしての心構え、留意点などについて事前研修を実施。

子供を対象とした調査

【対象】 都内在住の小学校4年生から高校生に相当する年齢児 (279名)
(区部25か所、市部11か所で実施)

【属性】 児童館・コミュニティセンターなどの公共施設に来所する子供
子供劇場などの文化関連団体やスポーツ関連団体に所属する子供
プレーパークなどの活動に来所する子供
町づくりや居場所づくりなど自主的な活動をしている団体に所属する子供
児童養護施設のグループホーム、母子生活支援施設、里親家庭などの施設で生活する子供

【方法】 ・ 原則として6～8名程度のグループヒアリング
・ 所要時間約90分(質問紙への記入、オリエンテーションを含む)

【内容】

下記のテーマについて付箋に記入、模造紙に貼付、それをもとにヒアリング
・ 「東京好きメーター(0～100点)」、東京が好きな理由、嫌いな理由
・ 「なりたい大人、なりたくない大人」
・ 「都知事のような立場で、自分の意見で社会を変えることができるとしたら、何をしたいか」
ヒアリングの内容を補完するために、アンケートを実施

【ヒアリングの結果】

東京が好きな理由
・ 東京という都市が持っているイメージ(日本の中心・首都、人工的、高い建物など)
・ 商業施設、情報伝達などの利便性
・ 子供たちの生活に密着した理由(学校・先生、友だち、地域、遊び場・居場所など)
東京が嫌いな理由
・ 環境的な要因(自然、道路・建物、人・交通、騒音、公共施設、遊び場・居場所など)
・ 大人の言動に対する批判的な要因(タバコのポイ捨て、唾を吐く、違法駐輪など)
なりたい大人
・ 外面的な理想像、内面的な理想像、安定した生活、社会的行動、具体的な職業など

なりたくない大人

- ・ 体験的に出てくる大人のマイナス行動、自立できない経済的弱者、自尊感情が高すぎる大人、マイナス思考の大人など
- こんな風に社会を変える
- ・ 戦争をなくす、ホームレスの解消、遊び場の充実、地域コミュニティの確立、子供の声を尊重する、子供の声を聞く場をつくる

【アンケート調査の結果】

東京都は好きか
好き=41.9%、まあ好き=45.2%、あまり好きでない=5.7%、好きでない=1.4%
大人になっても東京都で暮らしたいか
ずっと暮らしたい=43.4%、別の場所で暮らしてから東京都に戻ってきたい=29.0%
別の場所で暮らしたい=11.5%
自分のことが好きか
とても好き=14.7%、まあまあ好き=55.2%、あまり好きでない=17.6%、好きでない=6.8%
普通の遊び場
自分の家=19.7%、児童館などの公共施設=17.2%、公園=14.0%
友だちの家=13.6%、商業施設=9.7%、学校=3.6%
ホッとできる居場所
自分の家=59.5%、自然の場所=9.3%、友だちの家=4.3%、
児童館などの公共施設=3.9%、学校=3.6%、公園=2.5%

【考察】

多くの子供たちは、これまで大人に対して意見を表明する機会がなく、今回のヒアリングは楽しい体験だったと感想を述べている。
子供の成長過程における大人との関わりは、「叱る」「マナーをやらせる」などの教育的側面が重要であることには変わりはないが、「お手本となる人」「話を聞いてくれる人」など共感的な大人の存在も重要である。
現在の社会を大人以上に客観的に見ている意見も多く、今後、次世代育成支援行動計画が実行される中で、子供の声が社会に大きく反映されることを期待する。

乳幼児を持つ保護者を対象とした調査

【対象】 都内在住の未就園児のいる家庭の保護者（121名）
（区部7か所、市部2か所で実施）

【属性】 地域子育て支援拠点に来所している保護者

【方法】 ・原則として5～8名程度のグループヒアリング
・所要時間約90分（質問紙への記入、オリエンテーションを含む）

【内容】

下記のテーマについてヒアリング

- ・「今の子供の環境について」「10年後どうあってほしいか」
- ・「一時預かりについて」
- ・「子供家庭支援センターなどの施設の利用について」
- ・「産前産後に関して」「心の健康」「妊娠中の過ごし方」
- ・「子供の健康と発達」「相談する人は？」
- ・「パートナーシップ」「ワークライフバランス」
- ・「みんなで子育て、社会で子育て」

ヒアリングの内容を補完するために、アンケートを実施

【アンケート調査の結果】

子育てに生きがいと充実を感じる

とてもそう思う＝32.2%、そう思う＝44.6%、時々そう思う＝19.0%、ごくたまにそう思う＝4.1%

子育てが心から楽しい

とてもそう思う＝28.1%、そう思う＝41.3%、時々そう思う＝22.3%、ごくたまにそう思う＝7.4%

まったくそう思わない＝0.8%

子育てがづらい・負担に感じる

とてもそう思う＝2.5%、そう思う＝12.4%、時々そう思う＝34.7%、ごくたまにそう思う＝34.7%

まったくそう思わない＝15.7%

子育ては大切な仕事である

とてもそう思う＝57.9%、そう思う＝29.8%、時々そう思う＝5.0%、ごくたまにそう思う＝

2.5%、まったくそう思わない＝1.7%

子育ては大切な仕事であると社会から認められている

とてもそう思う＝9.9%、そう思う＝18.2%、時々そう思う＝26.4%、ごくたまにそう思う＝

26.4%、まったくそう思わない＝14.0%

【ヒアリングの結果と考察】

今の子供の環境について / 10年後どうあってほしいか

- ・乳幼児期の保護者は、学童期の子供への関心が薄く、なかなかイメージができない。異年齢の子供との関わりや、子育ての先輩層との交流が必要。
- ・外出環境、公園等の整備については多数意見が出た。
- ・町づくりへの住民参加など、「意見を聞く」機会の創出が求められている。

一時預かりについて

- ・利用意向はあるが、説明会への参加や登録など、具体的に行動に移していない人が多い。
- ・料金が安い、予約が取れない、手続きが煩雑などハードルが高いとの意見が多数出た。
- ・利用経験者からは、理由を問わない預かりの必要性が多く聞かれ、利用促進により子育ての負担感の軽減につながることも考えられる。

子供家庭支援センターなどの施設の利用について

- ・利用している場所が日常の延長上にある気軽に相談できる居場所となった場合は、子育ての負担感の軽減につながる発言が多かった。
- ・なじめない雰囲気があって利用しにくいなど、自分に合う場を求めて複数利用しながら試している様子も見られた。

産前産後に関して / 心の健康 / 妊娠中の過ごし方

- ・妊娠中は子供を産むまでの情報を必要とし、産まれてから必要な情報まではなかなか創造することができていない。逆に、子供を産んでからは、十分な情報を得るための時間がない。
- ・妊娠中から、産後に必要な情報を提供するための方策が必要。

子供の健康と発達 / 相談する人は？

- ・小児医療体制についての不安は多く聞かれた。
- ・発達や医療について深刻な悩みは、身内や電話相談に頼っている。

パートナーシップ・ワークライフバランス

- ・ワークライフバランスに関しては、あきらめ感がある。夫の働き方の現状について、社会的な課題と考えている人は少なく、肯定も否定もない。そのまま受け入れている。
- ・社会とのつながりが感じられていないともいえるか。

みんなで子育て、社会で子育て

- ・子育ては大事な仕事だと思っているが、社会から認められていないと感じている。
- ・下町、郊外エリアでは、多世代からの関わりを支えられている実感についての意見が多数出ているが、都心部では、温かく見守ってもらえていないという気持ち強い。

総合考察

東京に対する子供と保護者の思い

- ・子供は自分たちに関係ある課題には意見を述べたいという意識が強くある。子供の声为社会に直接届くシステムができることが、東京が「好き」という子供を多くするのではないか。
- ・乳幼児期の保護者は、地域につながりながら暮らすことが子供の豊かな育ちにつながるという確信を持っているが、きっかけがつかめず、子育てに対して社会（東京という地域）が認めてくれていないと感じている。

居場所の有用性

- ・居場所があるということが、自己肯定感などでプラスに働いている。
- ・子育てひろばなどの利用者は、いざとなれば必要な情報を得られると安心感を持っている。

話を傾聴することの有用性

- ・自分の考えを他人に傾聴してもらえるヒアリングは、エンパワメントにつながっており、こうした機会が広がることは、子供の生育環境にとって重要な要素だと考えられる。

都が取り組むべき課題

日常的に当事者の声を聴く機会を

- ・利用者の声を受け止める機会が日常的にあることが望ましい。スタッフへの研修などが必要。
- 定期的なヒアリングとそのためのファシリテーターの育成
- ・日常的な傾聴のほか、外部スタッフによる第三者的なヒアリングも必要。より効果的にヒアリングを実施するため、専門的なファシリテーターの技術向上のための研修が必要。

子供の声を聞き、それを反映する社会へ

- ・子供の声を聞くだけでなく、それを社会に反映していくことが重要。
- 子供の育ちを継続的に見るために
- ・子供が乳幼児期の頃から、保護者が学童や中高生の姿を見る機会をつくり、先を見通して子育てを考えてもらうことが大切。

調査の継続と活用

- ・当事者の声は環境の変化などに伴い変化する。ニーズにあった施策展開のためには、継続的な調査が必要。
- ・本調査の結果は、子供の声を大切にできる社会づくりに非常に有効。報告会やフォーラム等を開催するなど情報発信が必要。